

---

# 史上最強な、お猫さま！！

エディフィシス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

史上最強な、お猫さま！！

### 【Nコード】

N8812K

### 【作者名】

エディフィス

### 【あらすじ】

邦枝徹夜は死んだ…あっけなく、一瞬で。父と弟を残して逝くことが心残りだったが、光に包まれて成仏していった…と、思ったが！目を開けるとファンキーなじじいが立っていた！？

最強ご都合主義。そういう物が嫌いな人は回れ右してください。駄文で不定期更新ですが、完結目指して頑張ります！

## 第一話 死…そして…（前書き）

えー…初心者ですが、頑張りたいと思います。

前書きをだらだらと書くのもウザいと思いますので本文どうぞ！

第一話 死…そして…

状況を確認しよう。

道路の真ん中に広がるのは電柱にぶつかって大破したトラックと真つ赤な血の海。

少し離れた所にはヤジ馬どもが屯っていて血の海の中に存在する物体を見ていた。

そして、俺は宙に浮かびその物体を見る。

うん、俺だわ。

いや、正確には俺だったモノが正しい。

「……夢か…ふう」

「にいぢやあああああああん」

俺だったモノにすがりつこうとして親父に止められる我が弟。

うん、現実逃避はそろそろ止めよう。

俺、邦枝徹也は死んだ。

享年15歳。特技はバスケットで、ちょっとオタクな趣味を持っているものの友達は多かった。バスケットはスターティングメンバーに選ばれるほどの腕前は持っていて後輩にも好かれていたと思う。

けっこう青春を送っていたのだが、親父と弟の三人と一緒に出かけていた時に事件は起こった。

簡単な事、トラックにひかれそうになっていたから助けた。それだけだ。

まあ、これが女性や子供を助けようとしたのなら見栄えがいいのだが……

「それが…猫つてのはなあ……」

視界の端に居る助けた猫を軽く見て溜息。

「親父達には悪いが…死んじゃったもんは仕方がないか……」

もしかしたら……先に逝っちまったお袋に会えるかもしれねえし。

そんな事を考えていると空から、光が溢れて俺を包む。

「成仏ってヤツか…」

未練はある。もっとバスケはしたいし、彼女だっけつくりたい。やり残したゲームはあるし、親父と弟を残して逝くのは心苦しい。

だが、グダグダわめいても仕方がない。

死ぬ時は死ぬ。それが運命というのなら俺はそれを受け入れよう。

だけど、それでも一つぐらい言い残してもいいよな？

聞こえないとしても、自己満足だとしても。これだけは言い残したい。

愛する家族に

「ありがとうございましたっ…！」

視界は光に埋め尽くされ、その眩しさに目を瞑った。

そして、浮遊感が無くなり足に地面が有る事を確認するとゆっくりと目を開けた。

すると　そこには……

「よっ」

ファンキーなじじいが居た。

史上最強な、お猫さま!!

うん、二度目だけど今の状況を確認しよう。

辺りは、真っ白。何にも無く、ただ白い空間が何処までも広がっていた。

で、目の前には……

「反応がイマイチじゃのう……ワシ寂しい」

アロハシャツを着て、髪をリーゼントに決めたじじいが居る。

「ちっ…つまらん」

そして、じじいは自分の頭に手を置きた。 リーゼントを取り外した。

「カツラなのかよっ!？」

「おお! やつと、りあくしょんをとってくれたか!」

「リアクションの発音がおかしいのは置いて…ここ何処だよ?そしてアンタは誰?」

「むう……礼儀がなっておらんな、人に名を尋ねる時は自分から名乗るものじゃ」

「ああ…それもそうだな、悪かった。俺の名は邦枝徹也だ」

俺が名を名乗るとじじいは満足そうに頷いた。

「うむ、素直なのはいいことじゃ。ではワシも名乗るとしよう我が名は」

じじいは一息つく。そこには今までぶざけていた雰囲気は微塵も感じない。



威厳のある翁がそこには居た。

「アトゥム……ラ・アトゥムじゃ」

「…へ？アトゥム？」

「む」

5秒ほどの沈黙

ぼく、ぼく、ちーん

「アトゥムって、エジプト神話のアトゥム！？あの原初の丘ヌンよ  
り出し、ヘリオポリス神学における天地創造の神！？」

「ほう、よく知っておるな。いかにもそのアトゥムじゃ。アトムと  
かアテムとも呼ばれておるがのう」

「はあああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああ！」

「うるさいわいっ！？」

「すっ！

「くぶおっ！？」

しばらくお待ちください

「で、あの？アトムさんが何の御用でしょうか？後、ここがどこか教えてもらえるとうれしいんですが？」

「うむ、まずはここはお主と会う為に作った空間じゃな。他の者に邪魔されたくないんでな？」

さすが、創造神…ぱねえわ。じゃなくて!？

「お、俺と会う為に？俺ただの一般人ですよ!？」

「確かにお主はただの一般人じゃ…だが、お主の魂は人間にしては強すぎる」

「え、魂が強い？」

「うむ…はっきり言うとな。肉体の強さと魂の力が釣り合いすぎてるお。あのままじゃとお主が居た世界に悪影響を与えてしまうところだったんじゃない」

「え〜と…こういう事ですか？俺の魂が強すぎて、魂の力？みたいな物が肉体から溢れ出てしまっていた。そのせいで世界に悪影響を

与えてしまつから殺して魂を連れ来たと。」

「理解が早くて助かるのぉ…おおむね、その通りじゃよ」

「ちなみに、あのままだったらどうなりますか？」

「……世界が壊れる。その世界に存在する魂までもが輪廻から外れ消滅する」

「…そうですか」

正直、辛くないと思えば嘘になる。だが、俺が死ぬ事で皆が助かるというのならば少しだが救われる気持ちになった。

「で、俺はこれからどうなるんですか？このまま転生でもしたら同じことの繰り返しですよね？」

「うむ、じゃから、強い肉体を与えてから転生してもらおうと思う。そうすれば世界に悪影響はほとんど無いからの。」

「だ、だったら俺が元居た世界に…！」

アトムは首を小さく横に振って拒否した。

「あの世界は、お主が居たせいで不安定になっておる。今から少なくとも1000年はお主のような存在を転生させるわけにはいかぬ

のだ」

「そ、そうですか……」

ごめん、親父。そして我が弟よ。そつちには帰れそつちにはないや……

「じゃ、じゃが今度のお主の肉体はすごいぞ！身体能力は世界で最強クラス、魔力だってそうじゃ！」

「ま、魔力？」

「うん？おお、そうか。お主の世界には魔法が存在しなかったのじやな？」

「は、はい」

え、なに？魔法ってホントに存在すんの？しかも次の俺の体なんか魔法使えるみたいじゃん！

「ふむ、お主が転生する世界を魔法が存在する所にもできるが……どうするか？」

「そついつ世界にしてください！」

元の世界に帰れないのは悲しいけど……なんか、ワクワクしてキター

ッ！

「喜んでくれて何よりじゃ…では能力を決めようかの」

「能力？」

「うむ、お主には特別にいくつかの能力が与えられる。まあ、勝手にこんなところに連れてきてしまったお詫びじゃな…」

それから、真っ白い空間に現れいくつものカードが現れた。それは何処までも続いていて幻想的な光景だ。

「さあ、選ぶのじゃ、この中から五枚好きなカードを、そこに書かれている事がお主の力となる」

「え、選ぶだけでそれが俺の力に？」

「うむ、まあ変な能力もあるが大抵はプラスになる能力ばかりじゃから大丈夫じゃ。ああ、お主がやっていたゲームとかの能力もあるぞい」

「ま、まじっすか!？」

俺は意気揚々にカードの前に立ちカードを選び出す。

これか？いや…これの方がよさそうかも…適当に選んで変な力をも  
らったら嫌だからな…

よし、これだ！

選んだのは左にあるカード。空中から取り裏返す。

「栄えある一番最初の能力は？」

『魔力適正S』

「……シヨボ」

「じゃ、じゃがこれは、これでいいと思うぞ？転生して魔力適正が  
無かったら魔法使えんからな！」

「そ、そうですね！これで魔法使える事決まったんだし、それに  
まだ四枚選べるんですもんね！？」

うんうんと俺はアトムと頷きカードの方へ向き直す。

次に目を付けたのは、自分からみて右から三番目にあるカード。

「二枚目！」

『技の才能』

「……………びみよ」

俺的にはさあ…一方通行のベクトル変換とか欲しいんだけど？

「つ、次じゃ次いつてみよう！」

「さ、三枚目！」

『三歳から年をとらない』

「ちくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおお！？」

え、何これ？最悪じゃね？

「ま、待つんじゃ！魔法で姿を変えればいいんじゃない！」

「そ、そうか！？俺は魔法適正だから！」

「姿を変える事なんてきつと楽勝じゃ！」

そ、そうだよ！流石いい事に気付くな創造神！

「気を取り直して 四枚目！」

『無限の剣製』

「来た来た来た来た来た来たああああああああああああああああああああああああああ！！！」

「よ、よくわからんが…良いのが来たみたいじゃの？」

「ハイっ！最高っす！」

「そ、そうか！ではラスト行ってみよう！」

「おおっ！」

……ラスト、良いの来てくれよっ！

「おら、ラスト！五枚目だああああああああああ！！！」



俺は勢いよく、右端にあるカードに手をかけ、めくった。

そして…

『 猫になる 』

「「え?」「」

第一話 死…そして…（後書き）

む、難しい…

第二話 アンリミテッド・フィッシュ・ワークス(前書き)

勢いに乗って書いてしまった……

だが、後悔はしていない

## 第二話 アンリミテッド・フィッシュ・ワークス

嫌な沈黙が流れた。

真っ白い空間。そこに居るのは二人。

アロハシャツを着た、ファンキーなじじい。創造神、ラ・アトム。

身長175?ぐらいで、黒いTシャツを着た、青年。死にたてほやほやの邦枝徹也だ。

俺、邦枝徹也は自分の手元にあるカードに書かれてある文字をもつ一度見る。

『 猫になる 』

いっくいっ。

『 猫になる 』

あ、あれかドッキリか?神様のちょっとしたお茶目ってヤツか?

「 H A H H A H A ! もう冗談きついでアトムさん、ぶっ殺すぞ 」

「ちょ！いきなりなんじゃ！？それ選んだのお主じゃー！」

「だーから、アレだろ？俺を驚かそうとしてこんなくだらねえ物を仕組んだんだろ？オラ、サッサと吐けや」

ぼん

あ？なんだこのくそジジイ、肩に手なんて置き…やが…って…

「お、おい何だよ？その可哀相な物を見る目は！？」

「いや…なあ？流石のワシも同情を隠しきれんわい…」

…これマジなわけ？猫になるってマジなわけ？

「これ以上、ここに居て文句言われても仕方がないからのお  
グツナイ」

突如現れた。浮遊感。

あ、あれだ。昔、友達が俺をビビらせるために作ったとてつもなく  
でかい落とし穴に落ちた時の感覚に似てる。





10分後。

「はあ、はあ………OK、まずは一旦現状を確認するにや」

Q1ここは何処？

Aどっかの森。

Q2自分の姿は？

A黒い子猫。

Q3両親は？

A見渡す限り何処にもいない。

Q4何で、語尾がにや？

A知るかッ！！！！

「これじゃ、何も分からないのと同じだにや………」

ぴらっ…

「にや？」

俺の目に留まったのは、俺が最初に居た場所に落ちている一枚の白い紙だった。



「何だにゃ？」

とてとて、とまだおぼつかない足取りで歩き、紙を風で飛ばないように前足で押さえつけてから読む。

『やあ、邦枝徹也君。ラ・アトムだよ。キラッ（この口調はちよっと漫画の口調を真似てみたものじゃ。若者であるお主にはなじみやすいと思ってな）』

「うぜえにゃ……」

『さてさて、異世界に着いてそうそう驚いたと思う。何せ親が居ないんだからね。ぐすっ（泣）』

「そんなことどうでもいいから、早く語尾について答えるにゃ」

『でもでも、仕方がなかったんだ。君は人間に転生するはずで予定を組んでいたのに猫になってしまったからね。いきなりだったから異世界にトリップという形にしてもらったんだ。本当にすまないと思っっている（泣）』

「……………語尾」

『ああ、そうそう……語尾についてだが……』



森の奥。そこから響き渡る高笑いはもちろん俺の物だ。

だって、だってさ、ネギまだぜ？ネギま！俺の好きな漫画ベスト3に入るんだぜ。

「最高にハイな気分だにゃ！」

ククッこうなったら原作介入して、この異世界ライフを満喫しまくるぜっ！

「さてと、こうなったら…まずは自分の能力の確認だにゃ！」

魔法は…まだ使えないだろう。適正と魔力があっても知識がないんじゃない話にならん。誰かに修行をつけてもらってからだな。

ちなみに、変身魔法を覚えたら人間の姿になろうと思ったが止めた。何故ならば語尾のせいだ。まだ猫の姿だから許されるが人間の姿でこの言葉使いを使ってみる…シユールすぎる（想像した）

となると、やっぱりあれだな…無限の剣製！

「やってやるにゃ！5個の能力の中で一番まともだったヤツなんだ

「からにゃ！」

そして、俺は目を閉じた。

自分の心象世界を現実浸食させる。

唱えるように。

『 I am the bone of my sword  
d・/体は、剣で出来ている』

呟くように。

『 Steel is my body / 血潮は鉄で  
d fire is my blood / 心は硝子』

描く。

『 I have created over a thousand  
sandbrades・/幾たびの戦場を越えて不敗  
Unaware of loss・/ただ一度の敗走もなく、  
Nor aware of gain / ただ一度の勝利もな  
し』

自分の姿を。

『 Withstood pain to create  
weapons / 担い手はここに孤り。

waiting for one's arrival /  
剣の丘で鉄を鍛つ) 『

最強の姿を。

『 I have no regrets. This is  
only path / ならば、我が生涯に意味は不要ず 『

活目せよ。

『 My whole life was / この体は、  
"unlimited blade works" / 無限の剣で出来ていた 『

炎が走る。 天に地に 現実を浸食する

俺が 俺が、この世界の主だ。

目を開いた。 天は紅く燃えていた。

「成功だにゃ」

すげえ、これを俺が作ったのか。

天を見ながら、感動で心が震えた。 感激で涙が出そうになった。



1時間38分47秒後

「はあ、はあ、はあ……OK、koolに……違ったにや……coolになるんだにや」

固有結界を解き暴れていた俺は、一旦頭を冷やし思考に耽る。

無限の剣製は自分の心象世界を現実に浸食させる魔術だ。

つまり、あれか？俺が猫だから心象世界に内包されている剣が魚に変換されたともいうのか？

い、いや違う！きつとアレだ！アトウムの糞野郎が固有結界の中に魚を入れ込んだんだ！

なら……投影魔術で剣を作り出したらちゃんと剣が出てくるんじゃないか？

「そつにや！きつとそつに違いないにや！」

よじっやるぜー！

創造の理念を鑑定し、  
基本となる骨子を想定し、  
構成された材質を複製し、  
製作に及ぶ技術を模倣し、  
成長に至る経験に共感し、  
蓄積された年月を再現する。

「来るにや！エクスカリバー！」

俺の魔力が物体を構成するのがわかる、そして作り上げる。

騎士王の剣を

「……………本マグロ？」

自分の目の前に現れた物を見てしばしの放心。

本マグロ（クロマグロ）

目の前にあるマグロは1.5mと小ぶりだが、3mを超えることもある大型種。体は紡錘形で後半部も鱗で被われる。胸鰭は短く、その先端は第2背鰭起部に及ばない。体側下部にある白色斑は横帯のようになっている傾向があることなどが特徴。大西洋産と太平洋産とは連続に分布しておらず、亜種関係にあると考えるのが一般的である。





「.....」

なにこれー。

## 第二話 アンリミテッド・フィッシュ・ワークス（後書き）

叫んだら真名解放できました！キラッ

あと言いたいことが一つ。

f a t eフアンの皆さんすいませんでしたあああああああああ  
あ！！

第三話 ナギの頭の猫じゃらし(前書き)

え〜あ〜…うん。

今回は笑いがあんまり多くないです。

コメディー書いてる人すげえ。

### 第三話 ナギの頭の猫じゃらし

「……………にゃ〜?」

もう一度。

「……………にゃ〜?」

さあ、現実逃避はそろそろ終わりにしよう。

俺の目の前にあるのは、道だ。

木を薙ぎ倒し、土を抉った様なその道は何処までも続いているように見える。

もちろん、道の上にあったはずの山なんて吹き飛んじゃってるぜ!

「にゃはははは、真名解放にゃ!」

俺は、自分の目の前に転がっている美味しそうな本マグロを見て、顔を引きつりながら笑った。

うん、アレだ。ちよ〜つと刺激的だったから頭がショートしちゃったんだ。

で、正気に戻った瞬間。

「にゃああああ……………」

落ち込んだ。

だつてさあ〜。アレだよ？さっきのでっかい光の剣ってまんまエクスカリバーじゃん。

て事は、目の前に転がる本マグロはエクスカリバーなわけで、アーチャーみたいにカツコよく【unlimited blade works】みたいな事できない事が証明されたんだよ？使ったとしても周りに魚が出てくるだけなんだよ？

「うにゃあああ……………」

額が地面に着きそうなくらい落ち込んだ俺は、そのまま5分程落ち込んでから…

「にゃ？」

有る事実気付いた。

目の前には一本のバカでかい道、でその現象を起こした地点に居る俺。

「うにゃ？俺ってこのまま此処にいたらヤバイかにゃ？」

史上最強な、お猫さま！

「にゃっ……………にゃっ……………にゃっ……………」

俺は全速力で逃げ出した。まだ子猫と言っても流石はチート走っても走っても疲れない。

魔力はイマイチよくわからないが、気は適当にやったら体に纏う事に成功した。

技の才能さまさまだ。ビミョーなんて言ってサーセン！

そして、俺はこの体のチートさに改めて気付いた。

「にやはははは……凄いにゃ！ものすごいスピードで走れるにゃ！  
気持ちいいにゃ！」

ぐんぐんとスピードを上げる俺。

はじめて感じる速度、体を撫でる風。それはもちろん俺にとっては初めての体験だ。

ただ走るだけなのに俺は、楽しくて仕方がなかった。

【猫】になったという事も、語尾が【にゃ】になったことも、【無限の剣製】が【無限の魚製】になってしまったことも、今はどうでもいい。

もっともっと風を感じたかった。

もっともっと速度を上げてみたかった。

だが……考えてみて欲しい。



俺が物凄いチートで、最強の体と最強の魔力を持っていたとしても、  
だ。

今の俺の体は生まれたてホヤホヤ。子猫ちゃんなのだ。

で、そんな体で何にも食わずに、エクスカリバーの真名解放をして、  
気を無駄遣いしまくっている我流の身体強化なんてやったら……

「うにゃ？……視界が……？」

うん、倒れるわな。

「アル、こっちでいいのか？」

「はい、間違いありません」

俺達、紅き翼が見たのは一筋の光の極剣だった。

森の中央から突如現れたそれは、木を薙ぎ、地を抉り、山を吹き飛ばした。

有り得ない魔力。有り得ない威力。

最強の魔法使い。俺、ナギ・スプリングフィールドでもあんな事できやしない。

できたとしても、山の一角を消し飛ばす程度。3〜4回程度千の雷を放てばできるかもしれないが……

どちらにせよ、一撃で吹き飛ばすなんて芸当できねえ。

だからこそ、俺は思った。

「おもしれえ……」

森の先端。光の極剣が通ったと思われる場所を見つけるのは簡単だった。

上から見れば、森に一筋の道が現れているのだ。見つけれない方がおかしい。

「これは…凄いな……」

「ふむ、木の表面が焦げておる。先程の光の剣は熱量を持っていたのじゃな…」

詠春はその光景に驚き、お師匠は状況を冷静に分析する。

俺は、二人に習って辺りを見渡す。

「おーおーおー…ホントにすごいなこりゃ…」

「フッフ、最強の魔法使いと自称する貴方にライバル登場ですかね？」

「ハンツ！最強は俺だ！コレを自由自在に使える奴が居たとしても俺が勝つに決まってるんだろ」

アルは「そうですか…フッフ」とか言いながら不敵に笑った。

やっぱ…コイツ性格悪い。

と、その時だ。少し先にキラリと光る物が俺の目に入る。

「どうしました？」

「ん…いやな…あっちの方で何かが光ったような…」

そう俺は、アルに告げて。歩き出した。後ろに、アル、詠春、お師匠が続く。

そして……

「あ？」

「さ…魚ですかね？」

「魚じゃな…」

「ほ…本マグロ？」

本マグロそれは俺も知ってる。昔、日本に行った時に食った寿司。その具が確かマグロだったはずだ。

「いや、待ってください」

と、アルは俺が本マグロに触ろうとしたてを遮る。

俺がどうした？と答える前に、アルは目を閉じ、意識を集中させる。静かに確実に……

たたり、と一滴の雫がアルの頬に流れた。

おいおい、アルが冷や汗をかくなんて久しぶりに見たぞ……

「どうした、アル？」

「魔力を感じます」

「……………何？」

アルに言われて、俺たちは本マグロに意識を集中する。

それには、すぐに気付いた。

その魔力は外に溢れ出てはなく、中にその魔力を内包しているせいで気付かなかったが探ってみれば簡単に見つかった。

「おいおい……………冗談じゃねえぞ……………」

「う……………む、信じられんな……………」

俺たちが感じた魔力。それは逸脱した物だった。

「最高位クラスの魔法具じゃねえか……………」

「ワシはそれなりの魔法具を見たと自負しておるが……………これ程の物は見た事が無いのじゃ……………」

俺とお師匠は息を呑む。アルと同じく冷や汗を垂らしながら。

「とにかく、これがあの光の剣を生み出したのは間違いなさそうだな」

「ち、何だ…アレをやったのは技じゃねえのかよ……」

詠春の言葉に俺は一瞬落ち込むが、考えを改める。

これ程の魔道具を所持するにも、使うにも膨大な魔力、そして実力を必要とするからだ。

…やっぱり、おもしれえ……ぜってえコレの持ち主見つけてやるぜ。

「ですが……何故、これ程の魔法具が此処に放置されているのでしょうか？」

「確かに、そうじゃな…見た目はさておき、コレを使えば高位の魔道士が100人いたって葬れるはずじゃ……」

「……呪いが有るのかもな」

呪いか……

俺はニヤリと口を緩めた。

もし、そうだとしたら、危険かどうか確かめねとな。

「詠春…刀で突いてみるよ」

「なっ…！夕凧はそんな事に使うものじゃ…っ！それに、呪いがあ  
るかもしれないんだぞ！？」

「詠春なら大丈夫じゃ」

「ええ、詠春なら大丈夫ですね」

「3対1だぜ？とつととやれよ。それにな俺達も詠春にこんな危険  
な事を頼むのは心が痛むんだぜ？」

「嘘をつくなあああああああああ！！！」

という事で、俺、お師匠、アルは木の陰に隠れ障壁を展開し様子を  
窺う。

「…………ちくしょお…………ちくしょお…………」

涙を流しながら、詠春は夕凧の先で、そつと突く。

カンカン……

「」……「」

カンカン……

「」……「」

何も起こらないか…

「チッ！つまらねえ」

「何がだよっ！」

憤る詠春。カルシウム足りてるか？カルシウム。

「まあ…冗談はさておき、大丈夫そうですね」

「うむ、ほね。ナギ担ぐんじゃ」

ひょいっと、お師匠は本マグロを担ぐと俺に押し付けた。



「は……？何で俺が？」

「お主、この前ワシのぷりん食ったじゃろ」

「……………」

こわっ…！

それから、俺達はまた歩き出した。森の更に奥。数キロメートル程先はかなり大きい魔力を感じたからだ。

恐らく、このマグロの持ち主はソイツだ。見つけ次第、決闘を申し込んでやる。

「近いな」

「ああ、すぐ其処だ」

と、森が開けた。そこに着いた瞬間俺は叫ぶ。

「俺の名は、ナギ・スプリングフィールド！またの名をサウザンドマスター！」

ぜってえ、逃がさねえ！

「俺と勝負しろっ！」

しーん…。

ん？あれ？

「おい、どづした！出てこいよ！」

しーん…。

「おい、アル…此処で合ってるよな？」

「ええ、そのはずなんですが？」

その時だ。

よわよわしくも儂い声。いや…泣き声が俺達の耳に入った。

「にゃあああ……」

「……ん？」「」「」

一陣の風。それが俺を撫でた。

顔を撫で、毛を揺らす。猫耳に当たる風が少しこそばゆかった。

心地がいい風、温かい日光を目覚まし代わりに俺は目覚める。

瞼を開き。顔を上げる。

そして、最初に目に入った物は深紅の赤だった。

何だこれ？

深紅の赤……それは風に揺られてユラユラと動く。

あ……ああ……マズイ……

ゆらゆらとまるで俺を誘うかのような動きで、もう俺の頭にこれが何なのか？なんて事は頭にない。

うずうずと体が疼く。本能に従えと全身が要求する。コレを捕まえると…

俺は、その本能に抗う事が出来ず前足を上げた。爪を出し、上へと。

天高く、大きく振りかぶる。

そして　　振り下ろす！

「じゃあああああああああああああああああああああああ！」

ぞく

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ！」

え、何この品の無い悲鳴？

そして、俺は何処からか現れた腕に、首根っこを捕まえられて。

「痛いじゃねえか！」

「うにゃあああああああああああああああ！？」

ナギイイイイイイイイイイイイ！？

第三話 ナギの頭の猫じゃらし（後書き）

反省点

そのいちい！ 投稿が遅い！

そのにい！ 駄文！

そのさあん！ あまり笑いどころがない！

ちくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおお！

**第四話 吾輩は使いものである…名前は…タマ？だ！（前書き）**

結構早めに投稿することができました。

今回はいつもより少し長めです。

ナギが少し意地悪かもしれません（少し性格変わったかも？）

第四話 吾輩は使いまである…名前は…タマ？だ！

「にゃ、にゃんで、こんな所にナギ・スプリングフィールドがいるにゃ！？」

首すじを掴まれ、ぷらーんと宙釣りとなりながら俺は叫んだ。

それに、ナギ達、紅き翼は少し驚いたような顔を見せた。

「おお、喋ったぞコイツ！」

「ケット・シーの類ですかね？いや…それよりも……」

「お前の名前が猫にまで知られているとはな……」

「俺の名前も有名になってきたって事だな！」

俺がナギの名前を呼んだ事で盛り上がる紅き翼一行。

「あーそろそろ…にゃんで俺が此処に居るのか教えてくれないかにゃ？」

「あー…そうだったな。まあ、それはひとまず置いて……」



置いとくのかよ!？」

「これに見覚えはあるか？」

と、ナギが俺に見せたのは、本マグロ（エクスカリバー（仮））

俺が道に捨てて来てしまったやつだ。

「うにゃ…それは俺が作り出した奴だにゃ」

「……………は？」

あれ？俺なんか変な事言った？それに、なんか後ろの人達も固まっちゃってるし…

「こ、これを…お前が作っただど？」

「そつだにゃ」

沈黙。

「くくくくくくつ……………あははははははははははははははははつ!」

いきなり爆笑するナギ。

え、どうしたの？頭壊れた？

「おもしれえ…おもしれえよ！お前！」

「そ、それはどうもにゃ」

そして…ナギは不敵に笑った。

「お、おいナギ。お前…何を考えてる？」

詠春がナギに聞くがナギはそれに耳を傾けることは無かった。

ただ、俺の首すじを掴みながら、睨みつけ

「俺の使い魔になれ！」

「にゃ？」

史上最強な、お猫さま！

「題して！どっかの子猫さん歓迎会&鍋パーティー！」

ばちばち！

「待つにゃあああああああああああああああああああ  
」！

「ん？どうかしましたか？ああ…どっかの子猫さんが気に入らなかつたのですね？確かに名前を聞かなかったのは失礼でした。謝りましょう。」

ぺこりと頭を下げるアルビレオ。

笑いながら謝られてもムカツクんだよ！

「そんなことどうでもいいにゃ！それよりも何で俺が紅き翼に入る

事が決定しているのにゃ！人権無視だにゃ！」

「まあ、猫に人権なんてねえから置いておくとして…おい、使い魔。お前はなんて名前なんだ？」

「使い魔っていうのは決定なのかにゃ！？」

「おう」

「諦めるのじゃ…」

「ふふふ…ふふふふふっ…」

「すまん…諦めてくれ………」

満面の笑みで頷くナギ。やれやれとあきれれるゼクト。笑いつづけるアル。ただ一人謝罪してくれた詠春。

詠春さん、貴方だけですよ…

「で、名前は？」

「……無いにゃ」

「無い？」

不思議そうにナギは聞き返す。

それに、俺は自分に名前なんてもう無かったなあ…としみじみと思  
った。

邦枝徹也は前世の名。もう俺じゃない。この世界での新たな名が要  
る。

確かに、前世の名に未練が無いと言えば嘘になるが…

ただ、俺は思ったのだ。この世界で新たな人生を歩みたいと。

「だから、俺には名前なんてないにゃ…」

前の世界との決別するいい機会だとも思った。

だから…だから…今の俺は…

「ただの…ただの…猫にゃ」

「…そうか」

ナギは俺の頭に手を置き頭を撫でた。

少し、こそばゆかったけど…どこか暖かくて、気持ちよかった。



「使い魔が口答えするなよ」

ええええええええええ……………。

「よろしく頼みますね？タマさん」

ごらっ！アルビレオおおおおお！何、当たり前みたいにタマって呼んでるんだよ！

その含み笑い！ぜってえ面白がつてるよねえ？面白がつてるだけだよねえええええ！？

「そ、そつだにゃ！紅き翼、唯一の良心。詠春さんなら抗議してくれるにゃ！」

「おーい、鍋そろそろ食べられるぞー！」

唯一の良心がああああああああああああああ！？

「玉ねぎ食べるかのつ？」

「俺を殺す気かにゃ！？」

子猫に玉ねぎ食べさせると死にます。マジで。

「ハア…ハア…ハア…もう嫌にゃ…疲れたにゃ…」

「おい、タマ子の肉そろそろ食べごろだぞ！」

突き出された。うまそうな肉。

ぐんぐんぐんぐんぐんぐん。

…もじもじでもいませ。

「じゃぐじゃぐ…この鍋うまいにゃ…」

「そうか、喜んでくれてなによりだ」

「トカゲ肉でもそれなりにイケるもんだな？」

「ふふふ、そうですね」

「鍋將軍、とつとつ肉を追加するのじゃ！」



「鍋將軍…嬉しくないな…」

と、俺達が鍋を楽しく食べていた時だ。それは起こった。

突如、現れた大剣により、華麗に飛ぶ鍋。空を舞う肉。散る豆腐。どうでもいい野菜達。

ナギ、ゼクト、アルの三名は日本人顔負けの箸さばきで肉をキヤツチ。

俺は、何が起こったのか理解できず放心し、詠春は…ご愁傷様です。

「食事中、失礼〜〜ツ！俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！  
いっちょやろうぜツ！」

おおお〜原作どおりだと思いつながら、地面に落ちている肉達を見つめた。

「んぐんぐ…なんじゃ？あのバカは？」

「もぐもぐ…帝国のってわけじゃなさそーだな。なあ…えいしゅ…  
むおー!?」

鍋を被っている詠春を見て驚くナギ。

ナギ気付くの遅えよ…しかし…この肉どうするか…

「フ…食べ物を粗末にする者は……………斬る!」

ラカンに斬りかかる詠春。

「おお、本当に原作通りにゃ!」

と、言いながら　俺は思った。

俺、猫だしこれ食ってもいいんじゃない？

「にゃぐにゃぐ…あ、いけるにゃ」

「あの大男ちよっと前に南で噂になった剣闘士ですよ」　解ってる  
と思うけどアルです。

「へえー」　解ってると思うけどナギです。

「ほおー」　わかつ（もう、めんどくせえから）略（で）ゼクトで  
す。

「にゃぐにゃぐ…でもちよっと上っばいにゃ」

「ちょっと！タンマタンマ！あんたマジで強ええな！？」  
カンです。 (略)ラ

「ふざけるなっ！やる気なら本気出せ貴様っ！」 詠春。

「にゃぐにゃぐ…お茶がほしいにゃ」

「ホイ、一丁あがり」 R

「にゃぐにゃぐ…ん？詠春がやられたのかにゃ？」

ホントに原作通りだなあ…でこれからナギとラカンの13時間による決闘が始まるのか…

と、俺がウズウズしながら決闘を待っていた時だ。

「おおー。詠春を倒すとはやるな、アイツ」

…ん？

「じしし…間違えた。」「じしし」。

「詠春の弱点を突いたとはいえ、アイツとやったらおもしろえだろ  
うな」

なんで、此処に居るんですか？ My Master (仮)。

「よしっ！」

と、ナギは一人頷いて俺の首筋を掴んだ。

「……………」

「ナギ…一つ聞いてもいいかじゃ？」

「ああ…いいぜ？」

「何で…俺は宙ぶらりんになってるじゃ？」

「ご主人様、第一の命令を聞かせるためだ」

ああ…嫌な予感しかしねえ！。

「アイツ（バグキャラ）と戦ってこい」

「いやじゃ」

即答。

「いやか？」

「いやにや」

沈黙5秒。

「お前の實力見せてみるおおおおおおおおおおおおお！」

「やっぱり、拒否権ないのじゃあああああああああああ  
!?!」

投げ飛ばされました。b y タマ（仮）（元、邦枝徹也より）

ひゅるるるるると。俺は飛ぶ。風にでもなつたかのように。

俺は、飛ぶ。飛んで、飛んで、飛んで、飛んで。目の前に壁が現れた。

「おおお、でっかい壁だにや……………壁っ!?!」

反応が遅いつて？

ごめん、ごめん。一瞬、頭がショートしちゃったんだ。てへっ

だが、今の俺の状況はマズイ。ひじょーにマズイ。

俺は確かにチートだ。猫だけでもチートだ。だが、俺は自分の力を全然使いきれてない。

気のきの字も、魔法のまの字も知らないような男…もとい猫だ。

ナギに投げられたせいで時速……恐らくだが100？は出てるだろう。このままじゃぺちゃんこだ。

「にゃあああああああああああああああああ！？」

イエーイ 絶叫、即行、大絶叫 とタマはタマはやけくそ気味に叫んでみたり

「ネ、ネタに走ってる場合じゃ無いにゃあああああああ！」

も、もう一か八かだ！！

「こ、虚空瞬動にゃ！」

俺は、空気に地面が有ると思ひ込み、足に気を集めた。そして思ひつきり蹴る。

足に手応えを感じた。一瞬の浮遊感を感じた。

そして、跳ぶ。俺はバグキャラのもとへ。

「虚空瞬動が出来る猫とは、お前何者だ？」

で、目の前にはバグキャラです。

「…一応。ナギの使い魔だにゃ」

「あ？ナギって赤毛の魔法使いの事だよな？そんな情報聞いてねーぞ…」

「つい、さっき使い魔になったばかりだから、知ってるわけ無いにゃ」

「は、そついう事か…なら遠慮なく行くぜえ！」

ドンツと凄まじい音がして、一瞬で俺の前に現れたのは巨大な拳。

「にゃっ!?!」

「ちい、俺のパンチを避けるとはアイツの使い魔ってのは嘘じゃないようだな?」

「い、いきなりパンチはひどいじゃ! 相手は、かawaii子猫じゃ! 手加減ぐらいするにゃ!」

「俺のパンチを避けて、虚空瞬動までつかえる猫がかawaii何てあるかよ!」

「ごもつともで。」

「というわけで行くぜえ!」

ラカンがパンチを繰り出し、蹴りを繰り出し、詠春によって斬られた半分の剣を投擲してきた。

この、優れた動体視力、運動神経で避けられはするが…

一発一発がクレーターを作り上げる威力であり、チートとはいえ魔法障壁が使えない俺がくらったら一発でお陀仏だ。



「やるじゃねえか！」

「ギリギリだにゃ」

「だが、避けてるだけじゃあ勝てねえぞ！！」

ドンツと音を置き去りにするほどのスピードの拳を俺はすれすれで避けきる。

確かに、このままでは勝てない。あのエクスカリバー（仮）を直撃させれば勝てるかもしれないが、あれは投影し真名解放するまでに数秒の時間を要する。

その、数秒をあの手がキャラが見逃すわけがない。

「弱めの武器を当てた所で防がれるにゃ…せめて、動きを封じられたら…」

動きを封じる？

「も、もしかしたら…アレだったらいけるかもにゃ……………」

「よそ見してんなよッ！」

「にゃッ……………」

覚えたばかりの虚空瞬動でギリギリで避ける。

あ、あぶねえ…今のかすったぞ…

と、息をつく間にラカンが迫る。

今しか無いつ！

「ワカメええええええええええええ！(我に触れぬ/ノリ・メ・タンゲレ)」

マグダラの聖骸布です。

え、マグダラの聖骸布ってワカメなの？

と、考えてる間にワカメはラカンを捕らえた。

「な、なんだコレ生臭え！！つか、ほどけねえぞ！このワカメ！」

「一応言つところお約束。」

「フィッシュ」

続いて、俺はラカンが生臭いワカメに捕らえられてる間に次の行動に移った。

マグダラの聖骸布とはいえ、あのバグキャラだ。何をするか分からない。故にエクスカリバーのように数秒をかける様な宝具を使うより、簡単な武器を投影して攻撃した方がいい。

まあ、ただ鉄の剣とかを作るわけじゃないけど…

「くらっにゃ！」

投影により作り出す。

「メダカ流星群！（ナイフ！）」

ナイフが何十本も飛んで行くだけです。

ビュン！ビュン！ビュン！ビュン！ビュン！

「痛ッ！何でメダカに殺傷力が有るんだよ！？」

だが、流石はラカン『死なない男』『不死身バカ』『つかあのおっさん剣が刺さんねーんだけどマジで』の異名を持つだけはありナイフ程度では傷がつかない。

だが…

「げいじゅつは〜〜」

地面に散らばるメダカ（ナイフ）達。

「爆発にゃあああああああ！！（壊れた幻想／ブローケン・ファ  
ンタズム）」

どかーん

「ふぼらっ」

土煙が巻き上がり、変な悲鳴を上げたラカン。

「にゃはははははははははは！お猫さまをなめるんじゃないにゃ！  
」

大きく、高らかに俺は笑い声を上げた。

だが、俺は忘れていたのだ。

あの男が真正正銘のバグキャラだという事に…

「いてーいてー！いやホント見直したぜ子猫ちゃんよ」

「にゃ？」

土煙が風によって払われた。舞い上がる砂。

所々怪我をしているが、ラカン is 当然のように立っていた。

「いやいやホント痛かったぜアレは…」

振りかぶるラカン。

「ま。待つにゃ…暴力はいけないと思うにゃ？」

「はっはっはっ　　ふっどべや」

そして、俺は一瞬にして意識を刈り取られた。

うん、今日の教訓

バグキャラには手を出さない。



第四話 吾輩は使いみである…名前は…タマ？だ！（後書き）

えーチートのくせにラカンに負けてんじゃねえーよとか思われる人がいるかもしれませんで一応いつときます。

まず、主人公は才能は最強レベルですが、まだ何も覚えてえませんから紅き翼と比べると少し弱いです。

ですが、アルやゼクトなどに教わればとてつもなく強くなります。ラカンよりもです。そこるところご了承ください。

生臭いのはマグダラの聖骸布のみです。（食べれません）

第五話 技の才能が実はチートだった件（前書き）

更新遅くてスイマセン…そして微妙……

ああ、どうしよう…ネタがネタがあああああああああああ！！！！



## 第五話 技の才能が実はチートだった件

頭がガンガンとした痛みで襲われた。

その頭痛の痛みには俺は、軽く眉をひそめる。

ぱちぱちと火花の音が聞こえ、俺はそれを目覚まし代わりに瞼を開いた。

「起きましたか？」

身を起こした俺に声をかけて来たのは、ローブをまとった男だ。

「アル……」

ローブ姿の男　アルは、分厚い本を読みながら焚火の前に座っていた。

にっこりと俺に向けられた、胡散臭い笑顔を溜息をつきながら一瞥。

そして、辺りが暗い事に俺は、やっと気付いた。

視点を上へと変更。

そこにあるのは、雲一つない夜空。

星々は煌き。月が、美しく、淡い光で大地を優しく照らしていた。

「……夜にゃ」

「ええ、貴方は6時間ほど気絶していましたから」

その言葉に俺は、ラカンの一撃をくらった瞬間の事を鮮明に思い出した。

よく…死ななかったな。偉いぞ俺！

と、心の中で叫びながら、自分に称賛の声をあげた。

「で、ナギ達は何処に行ったのにゃ？」

「ああ、それでしたら。ラカンと一緒に夕飯用の肉を狩りに行つてますよ」

「ああ…そうなん………ちょっと待つにゃ」

今、変な事言わなかったか？

「どうかしましたか？」

「今、ラカンと一緒にっていったかじゃ？」

「ええ、言いましたよ」

「.....」

ふう…落ち着け俺。ここはクールに。

一息ついて。

「何でじゃ？」

「仲間になったからです」

うん、そうだね。ただ一つ言いたいね？

はああああああああああああああああああ！？

史上最強な、お猫さま！

アルの説明によるとこつという事らしい。

まず、俺がラカンの一撃をくらってノックダウン。

そこに駆けつけたのが、我が最低の主　　ナギだ。

で、それから俺はナギによってアルに預けられ、ナギとラカンは原作通りのガチンコ勝負突入というわけだ。

だが、ここで原作とは違う展開となった。

本来ならば13時間も続く、環境破壊オンパレードなハタ迷惑な戦いになるはずが、3時間ほどで決着がついたのだ。

結果は、ナギの勝利。どうやら俺の攻撃がラカンにダメージを与えていたらしい。

で、それから何故かラカンが『あの猫、おもしろえなあ』とナギに告げると。

ナギとラカンは、俺の話で盛り上がってしまったらしい。　オイ、ココ笑う所だから。

それで意気投合したバカ達は仲間になっちゃったらしい。

「何でそうなるにゃ…」

「まあ、簡単に言つとみんな貴方の事を気にいつてるんですよ」

「うにゃ…」

そう、はっきりと言われた俺は、少しばかり恥ずかしくて俯いた。

アルは、分厚い本から少し目を離すと小さく笑った。

「ふふ…噂をすれば影と言つやつですかね？」

アルが、森の方へ顔を向け、そう呟いた。

すると、そこにはそれぞれ獲物を持ったナギ達が談笑をしながら歩

いて来た。

ラカンは、肩にイノシシのような物を担ぎ、

ゼクトは、腕一杯に果物を、

詠春は魚を釣って来たらしく、

ナギは……俯きながらネズミを数匹持っていた。

ナギは、俺を見つけると表情が一変、大きく手を振りながら駆けて来る。

俺は、軽く苦笑しながら、小さく鳴いた。

ただこう思った。

散々な一日だったけれども。

悪くないなあ……って。

夜が明けた。

朝日が昇るのと同時に俺は目覚める。どうやら、俺が一番早起きだったらしい。

詠春達は木に身体を預け、寝息をたてる。

バカ二人　ラカンとナギは、大きなイビキをたてながら、大の字になって眠っていた。

ちなみに昨日の戦闘による、俺、ラカン、ナギ、計三名の傷はアルが治したらしい。

「暇だにや……散歩でもするかにや？」

他のみんなは、まだ当分寝ているだろうから、暇つぶしにはなるだろう。

そう思った俺は、後ろを振り返り　硬直した。

そこに広がるのは凄まじい戦闘の跡。

無論、それはナギとラカンの戦いの跡だ。

「す……い……にや……」

昨日は暗くてよく分からなかったが、明るくなってみると二人の力量がよくわかった。

山は一角が消え去り、地面にはクレーターが……

実際、これぐらいなら宝具を使えば俺にだってできるだろう。

だが、その宝具が実戦で使えるかどうかと聞かれたならば答えはN Oだ。

戦闘経験が足りない俺にとって宝具はまさに宝の持ち腐れというやつだ。

だから、俺は思った。

「強くなって、ラカンにリベンジにゃ！」

「修行をつけてくれ？」

俺は、みんなが目覚めてから頼み込んだ。



「そうじゃ、強くなってその筋肉にリベンジじゃ！」

「くっくっく…いいねえ、そういうのは嫌いじゃないぜ？いつでもかかってこいよ」

「ふんっ！そう言ってもらえるのも今のうちにや！」

「しかしだな…タマはどのくらい強いんだ？」

と、俺とラカンの勝負を見ていなかった詠春が聞いてきた。

「かなりのモノですよ、魚の攻撃は威力が有りますし、ラカンの攻撃を避けるだけの身のこなし、虚空瞬動も使えますしね」

ほう、と詠春が驚きと感嘆が混じった声をあげた。

「それなら、タマちょっと瞬動を見せてくれないか？」

「なんでじゃ？」

「入りと抜きのレベルを見たいからじゃな？」

ゼクトがそう確認すると詠春はそれを肯定する。

だが…俺は内心でヤバイと焦っていた。

何故かって？決まってる俺は瞬動が出来ないからだ！

虚空瞬動ができたから、瞬動もできるだろうと高をくくって。朝、瞬動を使ってみたら…見事に失敗しました、ハイ。

「え〜と…だにゃ…」

「どうした？早くやれよ」

と、急かしてくる、マイマスター。

「使えないにゃ…」

「は？」

「できないにゃっ！瞬動なんてッ！」

ぽか〜んと全員が口を開いて呆けた。

「いや…ちよつとまで…お前、虚空瞬動できるんだよな？」

「うわあああああああん……うるさいにゃっ！出来なくて悪

かったにゃっ！どうせ、俺は瞬動もできない駄目な猫にゃ！……！」

俺はそう、泣き叫びながら逃げようとして、ナギに捕まえられた。

「まあ、そう落ち込むなって……いいから一回やってみるよ」

「ぐすっ……わかったにゃ……」

地面に下ろされた俺は、虚空瞬動を使った時を思い出し足に気を送り、爆発させた。

「にゃっ！……ふばおじッ！」

木にぶつかりました。ハイ。

「……………」  
「……………」  
「……………」

やめて！そんな悲しげな目で見ないで！

「あ……お師匠、お手本」

「うむ」

と、ゼクトは魔力を足に蓄え、爆発させた。

ドン、シュツ、ザツ。

一瞬にして、10メートルほどの移動、それは瞬間移動のようにも見えた。

「うにゃあ……………」

「このような、感じでやるのじゃ」

「おら、やってみるよ」

ラカンが俺を持ち上げ、目の前に障害物がない位置まで連れて行った。

これなら、失敗しても、木にぶつかるなんて事は無いだろう。

「いくにゃー！」

足に気を蓄え、爆発させる！

ドン、シュツ、ザツ。

「おおおお…できたにゃ！」

と、俺は喜びながら、後ろを振り返る。

またもや、ポカ ンと口を開きながら、呆けた一同。

「ど、どうしたにゃ？」

「い、いや…一発で成功した事も驚きだが…」

「あれは…まさかなあ？」

何が言いたいんだ？こいつら？

「タマ、お前、虚空瞬動を使った時どういうイメージでやった？」

ん？虚空瞬動を使った時？確か…ああ、ラカンと詠春が戦ってる時に詠春が使ってたからそれをイメージしたなあ。

「詠春が使ってたのをイメージしたにゃ」

「はあ……やっぱりか……」

え、何、何がやっぱりなの！？

「タマ、気で身体能力を強化してみる」

「い、いきなり何だにゃ？」

「いいから」

「う……分かったにゃ」

身体中を気で包む、腕、足、胴体、頭それぞれを順に伝わらせる。

ばしゅ……。

なんか、気が駄々漏れでどこか弱い……

「ラカン」

「おつっ！……はあああああ……」

バシユツ！

ラカンの体に包まれる猛々しい気。それは、雄々しく、力強い。

「やってみてください」

と、アルが、俺の背中を軽く押した。

「にゃあああああああああああああああー！」

バシユツ！

……………あれ？

自分の体を見渡すと、ラカンと同じような気の流れがあった。

「はあ……やっぱりか……」

「これはもう、確定ですねかね？」

「お主も、バグキャラだったのじゃな……」

「うにゃ？」

詠春が俺の頭を撫でながら言った。

「お前は、人の技を模倣できるんだよ」



## 第五話 技の才能が実はチートだった件（後書き）

ナギ達がタマの力に気付いた理由は、気の運用がゼクトの魔力の運用にあまりにも酷似しすぎていたからです。

この能力は神からもらった技の才能の副作用です。

あと、技のコピーではなく、あくまで模倣です。ご注意ください。

第六話 シリアスとコメディーの両立を！（前書き）

まずは、遅れてスイマセン！

10000ユニーク、58000PVありがとうございます。

シリアスです、シリアスです！題名通りで、銀魂みたいな目指します。

## 第六話 シリアスとコメディーの両立を！

さてさて、前回にて俺のチート能力が開花したが……

うん、欠陥が見つかったんだ。

まず、俺の見ただけで模倣できる能力。

これは、コピーではなく模倣。

まあ、ぶっちゃけて言えば、マネできるだけなんだよね。

分かりやすい例を言えば、ガトウもしくはタカミチの居合い拳を模倣した場合。

確かに見れば、居合い拳を使えるけど、使えるだけだ。（人間だったらね……）

威力も無ければ、ノロイ、簡単に言うと思えるけど熟練度がゼロって感じた。

これは、魔法も同じ。魔法自体は使えるけど構成が甘かったり、精度低かったりと散々だ。

だが、これは使える。

何せ、見るだけで引き出せる手札の数がバンバン増えて行くのだ。

戦闘経験が少ない俺にとってこれはありがたい。

というーわけでー…ナギ、ゼクト、アルが使える魔法ほとんど覚え  
たぜ！

さあさあ、お猫様のお通りじゃあああああああ！…！

史上最強な、お猫さま！

「ふにゃ…招集？」

俺は、首をかしげながら聞き返した。

「ああ…帝国の大規模転移魔法によるワープ攻撃で、グレード＝ブリッジが陥落した」

「そこで、俺達、紅き翼も前線に復帰することになったんだ」

原作の介入。大戦の中でも激戦となったグレード＝ブリッジ奪還作戦。

その前にも幾つかの戦闘があったと俺は思っていたのだが…どうやらそれは俺の修行時間によって潰されたらしい。

「タマの初陣となるわけか」

「う、うにゃっ！が、頑張るにゃ！」

俺は意気込み、よしっと気合を入れた。

「あー…待て待て、我が使い魔よ」

「……なんにゃ、ナギ？」

俺は嫌な予感が頭をよぎる。ナギが俺の事をこつこつに呼ぶ時は大抵、変な事を頼んでくるからだ。

そして、ナギは俺に一つのプレートを渡してきた。

縦幅4センチ、横幅10センチといったところだろう。銀の装飾が施された鉄のプレートには、端に小さな穴が空いており、そこに鎖が通っていた。

「……………」

俺は首をかしげながら、前足でプレートをつつく、かちやかちやと鎖が音を鳴らした。

「裏返してみろよ」

ナギの言葉に従いながら、俺は器用に前足を使って、くるとプレートを裏返した。

そこには、文字がローマ字で書かれていた。

『ALA RUBURA TAMAR』

プレートの隅っこには紅き翼の象徴である片翼が、美しい装飾を持って描かれている。

「あー…まあアレだ…：タマは魔法を発動する時、尻尾で杖持って発動してるだろ？」

猫である俺は、杖を持つ事が出来ない。口で銜えれば詠唱する事が出来ないし、指輪型のなんて論外。よって杖を尻尾で持つという事しかできなかつたわけだ。

「だ、だからだな！…その…この前、街へ行った時に首輪型の魔法発動体が売ってたから買ってきたんだよ！」

ナギが頬を染めてそっぽを向く。

「もしも、ここで。『お、お前の為に買って来たんじゃないんだからな！たまたま良いのが売ってただけなんだからな！』と続けたら、完璧にツンデレだなあ。と、考えた俺は恐らく終わってる。」

「ふふふ…ナギ？嘘はいけませんね」

「ア、アル！？」

アルがナギを弄っている間、後でゼクトがこっそりと教えてくれた。

「どうやら、これはナギが特注で頼んだ品であり、30万ドラクマも使ったらしい。」

ぽかーんと、俺が口を開きながら約30分程、硬直したのは言うまでもない。

この後、俺達は戦場へと向かう。

俺は、やっとこの力を試せると、やっとみんなの役に立てると、喜んでいた。

此処は俺の大好きなネギまの世界だ。

だが…此処がフィクションではない、ただの？現実？だという事を。

俺は、忘れていた。



鋼と鋼がぶつかり合う音。血肉が舞う音。魔法が全てを焼き払う音。戦場。そこでは瞬く間に命が潰える。

後世に残るものとなる。グレードⅡブリッジ奪還作戦。

その中で俺達、紅き翼は前線に立ち、それぞれが戦闘を行っていた。

ナギは圧倒的な魔力で敵軍を薙ぎ払い、

ラカンはその有り得ない気と自慢の拳で敵を粉碎し、

アルは重力魔法で敵を押し潰し、

ゼクトは多彩な魔法で敵を翻弄し、

詠春は美しい剣技で敵を斬り倒していた。

ただ、その中で俺は

戦場の中で、突っ立っていた。

周りに居る。連合、帝国、両方の兵隊は猫が迷い込んだのだと思ったのか、襲ってくる気配は無い。

俺は、ただ、ただ、人が目の前で死ぬという事に恐れを感じ、動けないでいたのだ。

目の前で、鮮血が舞った。

目の前で、人が倒れた。

目の前で、目の前で、目の前で、目の前で、目の前で、目の前で、

人が……死んだ。

「あ……ああ……」

そんな、かすれた声しか出なかった。

俺は甘く見ていたのだ。最強の力をもらい、最強の仲間修行をつけてもらって。

戦場という名の殺戮を、ナギ達との試合と同じ物だと思っていた。

体中の毛が逆立ち、歯がカチカチと震え、俺はただ思った。

こわい。

死ぬのがこわい、殺すのがこわい、怪我をするのがこわい、殺気を向けられるのがこわい。

戦場の何もかもがこわかった。

だから、俺は逃げるように足を動かそうとした。だが、動かない。

恐れで、足が動かなかった。

だから、逃げるように、俺は目を瞑った。

そうすればきつと、目を開いた時には仲間が俺の目の前で笑っている事を信じて。

ガチャ……

「……………ッ！」

近くで音がした。鎧が関節部分とぶつかり合って起こる音。

そんな音は其処ら中から聞こえる。だが、それはとび抜けて近くから聞こえた。

おそる、おそる。と、目を開く。

獣人…だろうか？体中に毛が生え、顔は虎。鎧で身を包んだその男は、

「オオオオオオオオオオオオオオオオ

！！！」

雄叫びをあげながら俺に向かって駆けて来た。

正確には違う。俺の後方。そこに居る連合兵を倒そうとして突っ込んできたのだ。

その斜線上に俺が居た。ただ、それだけの話。

だけど俺の瞳には、獣人が、敵が、俺を殺そうと駆けて来たようにしか見えない。

その手に持つ、剣で俺を刺し貫こうとしているのだ、と。

「あ……………」

反射。それは特定の刺激に対する反応として意識されることなく起こるものを指す。

ナギ達によって鍛えられ、最強の身体を持った俺は、攻撃に対して考えるより早く行動を移す事がたびたびあった。

今回もそれだった。

一閃。

身体中に魔力を流し込み、跳んだ。爪に魔力を集中。

そのまま、振るった。

物を斬る時にある抵抗を前足に感じながら、俺は振るった。

「ぐああああああああっ!？」

絶叫、そして鮮血。

俺に迫っていた。男はそのまま崩れ落ちた。

俺の周囲に存在する兵が動きを止め、呆然とこちらを見た。

それは、そうだろう。屈強な兵が小さな子猫によって殺されたのだ。驚かない方がおかしい。

そこらで、『な、なんだ！？あの子猫は！？』『ど、どつやら…あのナギの使い魔らしいぞ』『なっ、それは本当か？』などという声が聞こえてくる。

だが、俺はうつろな目で俺が殺した兵を見続けていた。

「俺が…殺した…にや…」

目の前が、真っ暗になった様な気がした。その中で、俺は一つ気付く。

前足、そこにある黒い血。

俺が…殺したという証拠で、俺が…傷つけたという証明。

俺が　　命を奪ったという揺るぎのない事実。

……あ。

「あ……ああ…… ああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああ!？」

魔力が体中を駆け廻り、暴れた。魔力が外へと溢れ、風を起こした。  
それは、もはや突風なんて優しいものではない。

竜巻。

俺の半径500mに存在する、ありとあらゆる物が、問答無用で吹き飛ばされた。

刀も剣も杖も斧も槍も、あらゆる武器が天高く放り出された。

むろん、それは人も例外ではない。

連合兵も、帝国兵も、戦艦も、騎士用の竜も、鬼神兵までもが飛ばされた。

もはや災害。それを起こしているのは一匹の子猫だった。

その竜巻の中を抜けられる物など存在しない。

はずだったか…

一筋の閃光。それが、俺へと一直線に向かって来る。

叫び声と共に。

「こおおおおおのおおおお………バカ猫がああああああああ  
あああああ！！！！！」

「ふぼおろっ！！？」

拳骨。我が愛しのマスターは問答無用、魔力全開で拳を放ってくれ  
やがりました。

とてつもない痛みに襲われた俺は、器用に前足で頭を抱え、丸くな  
った。

「てめーは、なんで魔力の暴走<sup>オーバードライブ</sup>なんてやってやがるんだっ！」

「…うにゃ…だつて…だつて………ッ！」



あん？と呟いたナギは、俺の表情を見て怒りを抑えた。

「タマ…お前…殺しの経験が無かったのか？」

こくり、と俺は頷き肯定を示す。

「はぁ…お前、そういう大事な事は早く言えよッ！」

「うう…ごめんなさい……」

そんな俺を見たナギは、頭をかきながら、

「こつなつたら、本部まで連れていくが…いいな？」

俺は、もう一度。こくり、と頷いた。

このままでは、ナギ達の足手まといにしなければならない事が、よく分かったからだ。

ナギが俺を抱えようとして、しゃがんだ時。

あれ…水たまり？

ナギの真後ろ、そこには半径1m程の水たまりがあった。

俺は、それをおかしいと感じた。

何故ならば、先程の暴走による竜巻で全てを吹き飛ばしたからだ。

人も武器も戦艦も兵器も全てを、だ。

なのに何故、あの突風の中で水たまりがそのまま存在する事が出来る？

普通ならば、雫となって散り散りに飛ばされるはずなのに。

そして、水たまりの中からキラリと光るナイフが現れた。

転移魔法ッ!？

ナギは気付いていない。俺をに向かって手を伸ばしている。

「タマ…?…どうし…ッ!」

ナギも流石は最強の魔法使いと言われるだけはある、奇襲には直ぐに気付いた。

敵は、水たまりの中から姿を現し、三本のナイフが投擲された。

ナギはそれを避けようとし、気付いてしまった。

ナイフの射線上に俺も居る事に。つまりナギが避けたら、ナイフが俺に当たる事に。

その時点でナギの頭に避けるという選択肢は無くなった。障壁を張ろうにも遅すぎる。

間にあつたとしても、相手もそれなりの実力者だ。ナイフに込められた魔力の容量でそれは窺える。簡易の魔法障壁では止められないだろう。

だから、ナギは俺を庇おうと体を張る。その身で俺を守ろうと、

その中で、動く物は二つ。

一つはナギに向かって迫るナイフ。

そして、もう一つは 俺だった。

俺は跳躍、ナギの頭を越え前方に跳ぶ。そして、俺の視界に入るのは3本のナイフ。

俺はためらわず魔法を発動させた。

『魔法の射手 光の三矢!!』

無詠唱で放ったそれは、首輪のプレートが一瞬だけ発光し、魔法の射手が発射される。

それは、確実に3本のナイフに当たり叩き落とす。

が、俺の動きはそれだけでは止まらなかった。

「ファイ・フィルス・アレイス・クレイアス…来れ雷精、風の精、雷を纏いて吹きすさべ、南洋の風」

そのまま、虚空瞬動で敵に近づき。トンッ、と降り立つ。目前へ。

「シマッ…!?!」

敵が避ける暇など与えない。ナギを…仲間を殺そうとした罪は重い。

『 雷の暴風!』

荒れ狂う、魔力の力。暴風は敵を呑みこみ喰らいつくす。

辺りに響かせる轟音は、目の前に存在する事を許しはしない、と叫

んでいるようだ。

「タマ…お前……」

ナギが、心配するように声をかける。

きつとそれは、俺がまた人を殺してしまった故に出た声だ。

それに、俺は振り返り

笑顔を見せた。

「にやはは、ナギ、油断大敵にや！」

「へ？」

と、呆けた声を出す、ナギ。

「もう、大丈夫だから持ち場に戻ってくれにや」

「ちよっ…タマ、大丈夫って、そんなわけねえだろ！？」

「大丈夫って言ったら、大丈夫にや！…それに、ナギは俺を誰だと

思ってるにゃ？」

呆然とするナギに俺は、小さく笑いながらこう言った。

「俺は、最強の魔法使い…ナギ・スプリングフィールドの使い魔にや！」

それを言うと、ナギは数秒の沈黙を有し、確認するようにこう言った。

「……本当に大丈夫なんだな？」

「大丈夫にゃ！」

「なら…もう聞かねえ…だけど絶対に無茶すんなよっ！」

お前が言うかつ！？と考えながら、俺は深くうなずく。

それから、ナギは自分の愛用の杖に乗り、一直線に元の場所へと帰っていく。

「心配性だにゃあ…ナギは…」

ナギが飛んで行った方向を向きながら俺は、心の中で苦笑した。

先程、獣人を殺した時と暗殺者を殺した時。

前者は自分の身を守るために行い、後者はナギを助けるために殺した。

自分の身を守った時、俺はこう思った。コイツは俺のせいで死んだのか、と。

それから俺は、その罪悪感で暴走した。殺したという事実がこわくて、死んだ者に申し訳なくて。

だが、ナギを助けた時は違った。

殺した時、俺は殺したという事実よりも先にこう思った。ナギを守れたと。

そう思ったら、こわくなくなった。

無論、殺人に対する恐怖が無くなった訳ではない。ただ、恐怖よりも守れたという安堵の方が強かったただけだ。

つまり、俺は仲間を守るためだったら人を殺せる。

「にゃはははは……」

かすれた声が出た。

そしてこう思った。      イカレテル。

狂った精神構造だと。

たったそれだけ、それだけで、俺は殺人を行えるようになった。

何度も何度も、この恐怖と向き合い、徐々にこの想いを抑えるのではなく。

考え方の違いだけで、俺は平気になった。

そして気付いた。



ああ…そういえば、俺は世界をオカシクさせる程のバケモノだからこの世界に来たんだった、と。

それから数分、ガチャガチャ、と鎧や剣が出す音が聞こえて来た。

帝国の兵隊たちだ、後ろには鬼神兵、空には艦隊。数は視界を覆い尽くすほど、1000は軽く超えるだろう。

先程のオーバードライブで俺を脅威に思ったのか、これだけの軍勢は俺だけの為に連れてこられたらしい。

対して、援軍は探索系の魔法を使っても見つからない。

つまりこれは、1000対1に等しい。

「にゃははははははははっ！」

今日、何度めの笑いだろうか？

俺は、そんな事を考えながら啖呵を切った。

「我こそは、千の呪文の男、最強の魔法使いの使い魔  
強な、お猫様にゃ!」

史上最

この名を聞いて、命が惜しくなるようなら失せる。

この名を聞いて、踏みとどまるようなら失せる。

この名を知らぬのなら、その身に刻め。

『 u n l i m i t e d f i s h w o r k s 』

現実には心象世界に浸食される。

作り出された世界は前回とは違う、空は澄み渡る青空、草原が広が  
り、その中一匹の黒猫が佇む。

そして、この名を知らながらも歩みを進めると言つのならば

魚にまみれて溺死しろ。

第六話 シリアスとコメディーの両立を！（後書き）

シリアスって難しい……

あ、ちなみに、指導キーは適当に決めました。

## 第七話 脳内記憶から消去されました（前書き）

まず、謝罪します。

すみませんでしたあああああああああああああああああああああああ  
あああ！

今度からちゃんとしませんので許してください。

## 第七話 脳内記憶から消去されました

あのグレードIIブリッジ奪還作戦から数日がたった。

今だ戦争は終わらず、各地で小競り合いが起きている。

その中、連合の赤い悪魔、ナギ・スプリングフィールドを筆頭とした紅き翼の面々の活躍は、やはり素晴らしく目立っていた。

その活躍を知らない者は居らず、誰もが敬慕の念と畏怖の念を抱いた。

そのバケモノ集団に最近加入したガトウという男がいる。

やはりそいつもバケモノで、あの究極アルデマ・アート技法咸卦法を使いこなすらしい。

そして、あまり目立ってはいないが、紅き翼にはガトウと同時期に入った二人の少年が居る。

名を、高畑・T・タカミチ。もう一人はクルト・ゲーターという。

二人の力はその見た目通り戦闘力無い。だが、二人の諜報能力の腕は高くガトウの右腕となっているそうだ。

さあ、長い話はここまででいいだろう。

俺は、帝国の一般兵。通称モブキャラ。もしくは雑魚キャラだ。

名前？設定上の理由で有りません。えっ？なに？それはおかしいって？

しかたねーな…えー…あー…うんっ。『ああああ』で。

適當すぎるって？うるせーよ。人の名前にケチつけんな。

こほんっ……では、話を戻すが、俺が何で紅き翼の説明をしたかというのだ。

此処が戦場で、そして敵が紅き翼だからだ。

最初の兵力はこちらが八千、敵が三千といったところで圧倒的にこちらの優勢。

が、バケモノ集団が来て一気に形勢逆転。

チート様達は、俺達に大魔法やらなにやらを雨のようにぶつけて来るものだからさあ大変。

皆逃げ出しましたよ。ええ。

だが、紅き翼で忘れちゃいけないのが一匹いるね？そうだね、お猫様だね。

逃げる俺達に浴びせられる大魔法の数々、その可愛らしい姿の何処にそんな力があるのか問い詰めたい気分です。

いやー逃げられません。笑うしかね です。

近くに居た同志達（ロリコン同盟の皆さん）が一人一人倒れて行く。

あ、お猫様がこっちを向いた。どうやら次の標的は俺のようだ。

死ぬ。

そう感じた俺は、今までの事を思い返した。あれだ、走馬灯ってやつだ。

妻と出会った時の事、娘が生まれた時の事、娘に『ぱぱー。なんでこっちむいて、はあはあいつてるのお？きもーいしんでー』と言われた時の事。

しみじみとそんな事を思い返しながら、じゅるりと涎を腕で拭う。

お猫様が爪を振り上げながら迫ってきた。すっげースピードで。

お猫様　タマが俺の前に来た瞬間。俺は、史上最強のお猫様に対してこう思った。

あ、やべ…かわいいでゲス。



P・S タマに倒された敵兵の最後は皆、笑顔だったそうなの…

史上最強な、お猫様。

空は晴天、雲一つない日本晴れ。日差しが強く辺りは少し蒸し暑い。川辺の近くは涼しく、水面は日光を反射してキラキラと光っていた。ゆらゆらと泳ぐ魚を見ると、食欲をそそる。

俺、タマは木の上で一筋のワカメ（マグダラの聖骸布）を垂らしながら、食いてーって心の中で叫ぶ。

「ぎゃー」とワカメに捕らえられたエサが絶叫。俺はそれに、チッ

と舌打ち。

「なにやってるにゃ！そんな声を出したら魚が逃げるにゃ！」

「何、ふざけたことをほざくんですか貴方は！それに何ですかこの状態は！人権侵害ですよ！？」

と、いつちよまえに人権について語った。後輩兼工サ兼タカミチのような子供。

「なんですかつ！？タカミチのような子供って！タカミチですよ！？」

モノローグにつっこむなよ。

「ていうか、生臭いんですけどお！？解けないんですけどお！？あと、今更だけど何でこんな事になってるか説明してもらってもいいですかねえええええええええええええええええ！？」

騒がしいなあ、魚が逃げちやうだろ？

そんな事を考えながらも説明してやろうという気になる俺は大人だ。

「この辺りに人に噛みつく魚が居るようで、その魚が美味らしいの  
にゃ」

「あー…それとこの状態に何の関係が…？」

「だから、エサ」

さっきから言ってるでしょ？と俺は内心あきれた。

「……………」

俺とタカミチの間に、10秒の沈黙の時間が訪れる。

突然、プルプルとタカミチは体を震わせ、叫んだ。

「ふ、ふざけんなあああああ！何で僕がエサ！？何で人食い  
魚のエサ！？何ですかタマさんは僕の事、何だと思ってるんですか  
あああ!？」

「紅き翼の後輩兼エサ」

タカミチは即答した俺を3秒程、睨んだ後「はあ〜」と溜息をつい  
て肩を落とした。

「どうやら、後輩とエサの印象が同等だった事が悲しいようだ。」

「まあ、落ち着くにや。一気にバクツて食われるわけじゃないから」

「へ？そうなんですか？」

「考えても見るにや。こーんな浅い川に人を一人丸呑みするような魚が居る訳ないにや」

「あ、そうですね。それに考えてもみればタマさんは噛みつく魚と言っただけで人食い魚なんて言っただけでませんでしたね。」

「人食い魚じゃないとも言っただけでいいけど？」

「安心するにや、牙にちよこつと神経毒があるだけだから」

「……………え？」

数刻後、「イヤああああああああああああああああああ」という叫びが響いたのは言うまでもない。

ナギ達が居るキャンプ場までの帰り道。

俺はタカミチの頭の上に乗りながらめそめそしている後輩に話しかける。

「にははははは、悪かったにや。お詫びにこの魚少し分けてあげるから」

「い・り・ま・せ・ん!!」

ぷんっ、と頬を膨らませそっぽを向かれた。

「うまいの!」

がりがり、と生の魚をかじる。

「ちょっと……!?!?頭の上で食べないで下さいよ!!血が付きますっ



異常なまでの大爆笑だった。

ナギとラカンとゼクトは地面に転げながら笑い、

詠春とガトウは地面に膝を着き、体をくの字に曲げながら笑い、

アルとクルトは口元に手を当てながら笑みをこらえようとしていた。

「な、なんなのじゃ…?」

思わず呟く。

「」「」「」……………「」「」「」

沈黙。

誰もが笑みを止めた。転げまわっていた者も、膝を着いていた者も、口に手を当てていた者も。

誰もが、笑みを止めて俺を見た。

不気味なものを感じた。今まで笑っていた者たちが俺を見た瞬間にその笑いを止めたというその温度差に。





だが一つだけ分かった事がある。

よく、わかった。おめえら俺をバカにしてるんだな？

それは、もはや死刑宣告に等しかった。

ぷすぷす…と辺り一面が焼け野原になった後。

その中心。そこには体中に焦げ跡が着いた馬鹿共が正座で座っており、その前には可愛らしい子猫ちゃんが立っていた。

「どこが…可愛らしいんだか…」

「あん？」

ひい、と小さく悲鳴を上げる。馬鹿共。

その後方には、唯一惨劇から逃れることに成功したタカミチが小動物のように震えていた。まるで地獄を見たかのようにその顔は恐怖

で覆い尽くされている。

「さあーて、弁明はあるかにゃ？」

「あ、あのよお…俺達は別に馬鹿にしたわけじゃねえんだぜ？」

おそろおそろ、そう言ったのは、我らがリーダー、史上最低のバカヤロウ、ナギ・スプリングフィールドだ。

「そ、そうじゃ、その通りじゃ！ちょーと面白かっただけでタマを馬鹿にしたわけじゃ…」

「ば、ばっか！お師匠…ッ！」

ナギがゼクトの口を塞ぐが、もう遅い。その言葉はもう俺の耳に入ってしまったのだから。

「それを馬鹿にしているって言うじゃないのかにゃ？」

ひい、と二人は師弟仲良く声を上げた。

「……おい、ガトウ、アレを早くタマに見せるよ」

「なっ！……ラカン、それは俺に死ねというのか！？」

「クルト君……君がアレを見せるんだ。……神鳴流教えてあげるから！」

「……嫌ですよっ！僕はまだ死にたくありません……！」

小声でそれぞれ相談するが、それを見逃す程俺は甘くない。

「アレって何にゃ？」

びくんと全員が体を震わした。

「これです……」

そして、観念したかのようにアルが顔を引きつらせ、濁いた笑みを浮かべながら、数枚の束となった紙を俺に見せた。

「????？」

俺は、その紙の束が風で飛ばされないように、肉級で地面に押さえつけながら読み始めた。

『〜紅き翼〜二つ名、とくしゅー』

.....なにこれ？

「それはだな…えっと…俺って紅き翼に入って日が浅いだろ？だから、皆の事をもう少し詳しく知りたいなあーって思ってたんだ」

ガトウの説明になるほどと納得した俺はそれを読み進めることにした。

やはり漫画と変わらず、ナギには『連合の赤い悪魔』と『千の呪文の男』の名が付き。

詠春やラカンにも、『サムライマスター』と『千の刃』の名が付いていた。

他のメンバーにもいろいろと付いていたがそれは読み飛ばすとしてしよう。

で、最後の項目には、こう書いてあった。

『タムの二つ名』

「うにゃ？俺にも付いていたのかにゃ？」

「あ…ああ！そうなんだよ、お前にピッタリだぜ！」

ナギのその言葉に期待を膨らませ、俺は自分の名前の下にある。二つ名を見た。

『史上最強な、お猫さま』

「…なるほどにゃ」

確かに、自分で名乗ったし、妥当な所だろう。と考えると、俺はうんうんと頷いた。

が、一つ気になった事があった。

このバカ達は、一体何が可笑しくて、笑っていたのだろうか？

この二つ名一覧表には、特別面白い事も、可笑しい事もない。あるとすれば、『ラカンの二つ名』の項目に乗っていた『死なない男』『不死身バカ』『つかあのおっさん、剣が刺さんねーんだけどマジ

で』の異名ぐらいだ。

むしろ、普通に見せてもらったら俺は喜ぶだろう。何でコレを見せる事に決ったんだ？

そう、思った時。俺は一つの事に気付いた。

「あれ？まだ紙が余ってるにゃ？」

「「「「「「「ちよ……ッ！……！！それを見ちゃあかああああああああああああん！」「」「」「」「」

彼らの叫びも空しく、かわいかわい子猫ちゃんは、その紙を見てしまうのです。

へらっ。

『タマのこれは痛い……』とくっつて』

ビキリっ！

俺の額に青筋が立つのを俺は間違いなく感じた。

「あ、あーこれはだな…えー…」

紅き翼のメンバー全員が言い訳を述べるが、俺の耳にはそんな戯言は入ってこない。

もくもくと、痛い二つ名を順番に見ていく。

そのいちい。『パクリの王様』

だって人の技を奪って来るんですよッ！b y 帝国の魔法使い。

そのにい。『タマタマ』

名前を二回連続で呼んだらエロクね？b y ああああ。

そのさあん。『魚を従える者』

魚があッ！魚があッ！b y 帝国の兵士。

そのよおん。『つーかあの猫、何なんだよおツ！可愛いんですけど  
』

あれです。食べちゃいたいです。b yアリアドネー魔法騎士  
団員。

そのごお。『あるーひーもりのーなかー タマさんにー であー  
ったー 森のくまさん替え歌v e r 』  
うん、ゴメン。思いついたんだ。b yエディフィシス。

e t c . . . e t c . . . e t c . . . e t c . . . . . 。

泣きました。ええ、もう盛大に。

「あー…そんなに泣くなよタマ。」

「にやってええええ……ひっぐう……ひっく……」

なんで、俺はっかりこんな二つ名なのさ！俺も、ナギヤラカンみた  
いな二つ名欲しいよ！史上最強な、お猫さま。も悪くないけどさあ。  
あれだよカッコイイ二つ名も欲しいじゃん！



「だったら、仮契約すればいいんじゃない？」

「はい？」

俺はその言葉の意味がよく分からなくて泣くのを止めた。

「ああ？それはどういう事だラカン？」

「いやな、ちよつとした思い付きだがよお。タマは俺の千の刃みたいな二つ名が欲しいんだろ？」

俺は、こくりと頷く。

「俺の二つ名って千の顔を持つ英雄の形状から来てるわけだろ？だったらタマもア ティファクトを手に入れば、そんな二つ名も手に入るんじゃないの？」

「な、なるほどにゃ……」

「ラカン！てめえも、たまにはいい事言うじゃねえか！よし、そうと決まったら早速準備だ！アル頼むぜ！」

「はいはい、わかりましたよ。この魔方陣作るのちよつと面倒なんですけどね」

ぶつぶつ、言いながらも。しっかりと仕事をするアルを、俺は頼もしく思いながらもナギに聞いた。

「か、仮契約って…もしかしてキスなのかにゃ？」

「ん？ああ…そういう方法もあるな…だけど俺達の方法は互いに呪文を唱えるだけだぜ」

ほっと一安心。どうやら、アルの方も準備が終わった様だった。

「よし、始めるぜ。俺の後に続いて唱えろよ」

「わ、わかったにゃ」

そして、魔方阵は光り出す。光の粒子が俺達の周りを飛び回るその風景は幻想的だった。

『我、ナギ・スプリングフィールドは彼の者タマを従者にすることを認めよう』

『我、タマは彼の者ナギ・スプリングフィールドの従者となる事を誓うにゃ』

そして 光は急速に一点に向かい収束し形を成そうとして、

ポフツ。

そんな、効果音を出しながら、魔方陣は光を失った。

「「……………え？」」

ちよ…ツ？あれ？あれええええ！？

そんな事を考えながら俺は周囲を見渡すが、状況は変わらない。カードは出ず、魔方陣は光を失った。

「し、失敗にや？」

「どついう事だアル？」

ナギがアルに聞く。それに、アルは少し呆れた様な顔をしながら、こう言った。

「恐らく、語尾をつけたからではないかと」

「「は？」」

思わず重なる俺達。

今、何て言った？語尾、語尾だと？あれか、最後に『にゃ』を付けたから！？

「じゃあ簡単じゃねえか、語尾をつけなければいいだけなんだし。次は成功するな」

「ええ、そうですね」

意気揚々ともう一度準備を進める二人と対照的に俺は落ち込む。

どろろ。。。

Take 2

「よし、じゃあ行くぞタマ。今度は気をつけるよ」

「わ、わかったにゃ」

「じゃあ、始めますよ」

アルの声と同時に、再度魔方陣は力を得て発行する、光の粒子が俺等を覆う。

『我、ナギ・スプリングフィールドは彼の者タマを従者にすることを認めよう』

『我、タマは彼の者ナギ・スプリングフィールドの従者となる事を誓うにゃ』

ポフッ。

「」「」.....「」「」

Take 3

「アハハ……こ、今度は気をつけてくれよ?」

「わ……わかったにゃ」

そして…

『我、ナギ・スプリングフィールドは彼の者タマを従者にする  
ことを認めよう』

『我、タマは彼の者ナギ・スプリングフィールドの従者となる事を  
誓うにや』

ポフッ。

Take 4

ポフッ。

Take 5

ポフッ。

…………… 10分後。

Take 20

ポフッ。

「タマあゝ？オマエいい加減にしろよおお？」

「ふざけてないにゃ！ふざけてないんだからにゃあ！」

ナギによって、頭を掴まれた俺は声を荒げながら否定する。

だって仕方ないじゃん。無理なんだもん。

「ナギ、タマもふざけてないようじゃ。どうやら語尾なしで喋られないようじゃの」

「ゼグドおおおおお」

流石だよ。流石ナギの師匠だと尊敬するよ。わかってくれてありがとう。無駄に歳くってねえな。

「ですが、どうします？これでは仮契約が出来ませんよ？」

「あの、でしたら他の方法で契約したらいいのでは？」

「おお、その手があったか！流石クルト知恵が回るな！」

…他の方法？

「私達だったら、問題がありますが…タマだったら大丈夫でしょう」

「ああ…なんたってタマは…」

「……………ネコだからな!」……………

ダッシュ!ダッシュ!ダッシュ!

俺は逃げ出した。何でかわからないけど逃げ出した。

俺の本能が告げる。逃げなければ大事なモノを失うと……

タマは逃げ出した。しかし、まわりこまれてしまった!

「何故に、ドラクエ風!？」

「おいおい、どうしたんだよ、タマ?」

「怯える必要はないんですよ?一瞬で済みますから」

「俺は別にネコ相手だったら、別に平気だしな」

「ひいひいひい!来るにゃ!来るんじゃねえにゃ!」



と、その時ビリビリと体中に電流のようなものが流れた。魔力の流れ、気の流れが止まる。

「……………へ？」

「よし！今だ！首輪の機能でタマの力を一時的に止めたぜ！」

「ふざけんにゃああああああああああああああああああああああああああああああ！！？」

…………… 1時間38分と46秒。

この時間が何なのかって？

決まってるだろう？俺が落ち込んでいた時間だ。

「うう……はじめてだったのに……………」

「まあ、そんなに落ち込むなって…人間相手だからノーカンだろ」

俺、心は人間のつもりなの！！！！

まあ…それは俺の頭の中から消去して、だ。

俺の前には一枚のカードがある。俺のパクティオ カードだ。

そのカードは俺の姿が映っていた。唯一つ違う点は白っぽいベレー帽をかぶっていることぐらいか。

「あー、この前上げたお前の首輪、パクティオ カードを入れられるようになってるから」

「え、そうなのかにゃ？」

ナギの言葉通りに俺は、首に掛かっている首輪を弄ってみた。するとプレートが横にスライドできるようになっておりそこにカードを入れられるようだ。しかも、いちいち取り出す必要なくア ティフ アクトを呼びだせるらしい。

「まあ、そんなことは良いからはやく出してみるのじゃ」

「はい、僕も見たいです」

クルトとゼクトに急かされ俺は呟いた。

「来れ（アデアット）！」

すると、カードを入れた首輪が光り、俺のア  
ティファクトを呼び出す。

それは…

「……ベレー帽？」

誰もが、首を傾げながらそれを見た。

白みがある、可愛いベレー帽は高価そうだが何処にでも売って  
そうな代物だ。

「まあ、被ってみたらどうだ？」

「うにゃ、でも俺にはちよっと大きいにゃ…」

そう、明らかにそのベレー帽は人間用だったのだ。俺が被ったら首  
どころか体の6割程、埋まってしまいそうだった。

「いいから、被れって!」

「はぶっ!」

ナギに無理やりかぶらされ、一瞬視界が真っ暗になる。が、一瞬で視界が開いた。

ほお。と感心した声が周囲から聞こえる。

「どうやら、所有者によってサイズが変わるようだな」

「で、どうだ?何か変化はあったか?」

俺は、体を見回す。体が透明になった訳でもなければ、大きくなったり小さくなった訳でもない。

魔力の強くなった訳でもなければ、気が強くなった訳でもない。

「どっついう事にゃ?」

ナギに問おうとして、

サッ。



「………どんまい」

「そんなの、あんまりにや あああああああああああああああああああ  
あああああああー！」

第七話 脳内記憶から消去されました（後書き）

やはり、うまくいかない。

ちよつとの間書いてなかったんで書き方忘れてますね。最後グダグダだし。

あ、ちなみにア ティファクトの能力はちゃんとあります。

ただ、気付いてないだけです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8812k/>

---

史上最強な、お猫さま！！

2010年10月12日19時40分発行